

国語教育における人間教育

——人間形成をめざす国語表現教育のための模索——

片山敏之

はじめに

現下の高等学校は大きな転機に立っている。昭和54年1月、国大協による大学入試改革——共通一次学力試験——が開始され、また昭和57年実施を目前に高等学校の学習指導要領が全面的に改訂された。高校現場にある我々国語教師も、当然この現実から目をそむけることはできない。また広島県においては急激な沿岸部への人口増と高校進学率97%という、全国一の現状にともない昭和49年4月、新設の2高校に始まりすでに10校が新設された。私は昭和49年4月、広島県最初の新設校の開校と共に転任し、新しい学校づくりに働いてきた関係上、勤務校の実態に即応しつつ取り組んできた教育実践を、担当教科目の現代国語(一)に焦点を絞ってレポートしていくことにした。

1 勤務校ならびに授業者の実態

五日市高校は広島市のベクトタウンとして全国一の人口8万余を擁する五日市町の西北端、極楽寺山の中腹、海拔130mの高台を造成した校地で観音台団地に隣接し、宮島をはじめ瀬戸内海の眺望はま

さに佳景、静かな教育環境に位置している。開校当初の2年間は単独選抜のため、広島市内より約1/3の生徒が通学し、生活指導に種々の苦労があったが、昭和51年度から広島全県にわたる学区制の変更にもない、佐伯郡、大竹市を含む第2学区として、廿日市高校と2校の総合選抜制が施行され、選抜母胎は変動し、広島市内からの通学者が激減した。保護者の過半数は広島市に通勤する人々で、その他は学区内の兼業農家や商業活動等に従事している。学校の内容規模は全日制普通科、1学年8学級の24学級、一〇八〇名定員の大規模校といえる。男女比はほぼ同数、昭和54年度の進路状況は就職者5%、残りはすべて大学等の進学志望者で、いわゆる進学校である。志望の内容は国公立大学が38%、短大(殆んど女子)36%、専修学校、各種学校5%、残りは私立大学(国公立大学との併願をのぞく)となっており、多様な志望内容を示している。

学校運営は学級担任(正・副)にあわせて8部(総務、教務、生徒指導、進路指導、同和推進、図書、保健、視聴覚)の何れかに所属し、各分掌責任者による運営委員会を構成して、日常の校務運営の原案を作成し、円滑な運営をはかっている。特活へは運動部、陸上部の参与の何れかを兼任しクラブの振興に尽している。開校以

来、「気品」「気力」「体力」を校是として開拓者の精神と創造への灯をかかげて教育活動をつづけてきたが、先年来の日教組の主任制反対闘争にともない、単層構造による分掌の係制が多くの高校現場に浸透しており、本校もいま管理職と分会とで、接点を求めての模索が継続中である。高校教員の職務内容は教科指導、校務分掌、特活指導をあわせ担当して日々教育活動を行なっているものである。私の場合、開校時、生徒指導、2年目図書館、3年目以降4年間進路指導と、それぞれの責任者として新設校の軌道敷設をしてきた。過去4年間進路指導室に常駐して、就職・進学全般にわたる総務的な役割といわゆる進路指導活動を行ない、本年度の国語科では現代国語(Ⅰ)12時間、古典Ⅱ(3年)6時間の授業を行った。本校は第2年目より各教科別に準備室を持ち、各教科担当者が常駐、他に図書館、同和推進、進路指導室、総務、教務室にそれぞれ常駐しているのが現状で、私の場合、大学、企業、予備校、受験産業関係者との応待が数多く、大学入試説明会、企業視察への出張に追われ、週一回の国語科会に出席する以外、他の国語科教師との対話交流をはかる機会が少なく、授業に関する相互の意見交換、共同研究の時間が持ちにくい実情にあり、これが打開に苦慮している。なお校内会議は週一回の運営委員会、隔週毎の職員会議、学年会議に出席し、中食時、放課後には生徒の進路相談にあたっている。以上の実態から、校内ではゆっくりに教材研究等に取り組む時間が取りにくく、帰宅後の時間を教材研究、教科教育研究にあてざるをえないものの、校務の残務を持ち帰ることも多い実状であった。前述の実態にもとづき、きわめて簡便にして実施可能の項目に絞った粗雑な

実践報告となつてしまつた。

2 実践報告にいたる経緯

校内において授業時間外の教科研究活動の時間が持ちにくい関係上、事前に緻密な学習指導計画や実践経過の記録、授業後における反省、整理はできにくかつた。そこで現代国語Ⅰの教科書を中心に、各単元の教材を最少限実施することを目標においた。従前の経験を基軸に、一年間実施した授業結果に対して、総括はアンケート方式で生徒の反応からである問題の発掘をめざした。ためにこのレポートは総花的にならざるをえなかつたし、普段着の平凡なものとなつてしまつた。これは授業者の教科指導の鏡ともなるので、今後の教科教育活動の反省に役立てたいと思つている。なお授業中生徒に作業させた生徒作品は、このレポートで随時使用させて貰つてゐる。

3 現代国語Ⅰの実践の総括

(1) 調査資料について

3学期末考查の直前(3月上旬)アンケートを実施した。アンケートを実施したのは1年生の奇数クラス(1・3・5・7)を担当したので1年生の半数にあたる4クラス。資料としたのは使用教科書(学校図書「新編現代国語Ⅰ」)で教室で実際に授業を行なつた教材である。(左記の目次で◎印のしてあるもの。△印は一部のクラスのみ実施)

目次

- 一、ことば
 - ◎ことばの習得
- 二、詩
 - ◎さようなら一万年
 - ◎永訣の朝
- 三、小説
 - ◎幸福
 - △赤ままの花
- 四、作文
 - ◎文章について
 - ◎レポートの書き方
- 五、随想
 - ◎板極道
- ◎スポーツと人生
- 六、小説
 - ◎羅生門
 - 万華鏡
- 七、評論
 - ◎まぼろしの「村」
 - ◎捨てない技術
- 八、戯曲
 - ◎奇跡の人
 - ◎劇・人・ことば

野地潤家

草野心平

宮沢賢治

安岡章太郎

堀 辰雄

阿川弘之

棟方志功

内村祐之

芥川龍之介

ブラッドベリ 小笠原豊樹訳

佐藤藤三郎

押田勇雄

ギブソン (渡辺浩子訳)

内木文英

九、記録

未来への遺産

民話との出会い

十、小説

△高瀬舟

十一、短歌

◎死にたまふ母

◎短歌の鑑賞

◎近代の短歌

十二、評論

「が」の論理の貫徹

美しいことばとは

堀田謙吾

松谷みよ子

森 鷗外

齊藤茂吉

子規、左千夫、赤穂、空穂、晶子、
節、白秋、牧水、啄木、逍空

加藤秀俊

茨木のり子

本校国語科の教育課程は次の表にみる如くである。

科目	学年		年
	1年	2年	
現代国語	3時間	2時間	3時間
古典Ⅰ乙	2 "	3 "	
古典Ⅱ	理系 十八史略		2時間
	文系 十八史略		
	徒然草		2時間
	徒然草		
	源氏物語		3時間
	詩文抄		

(注)

国語科の内部事情で、便宜的に現代国語Ⅰで2学期より、1時間を古典Ⅰ乙の「漢文」の授業にあてている。古典Ⅰ乙では古文ならびに文語文法、従って現代国語Ⅰの授業数は年間約20時間減少して

いるのが実情、来年度は本来の古典Ⅰ乙に「漢文」をかえす予定で検討している。

② 調査項目とその反応

I 「国語」は好きな教科ですか？

① 好き

計	女	男	クラス
5	5	0	1組
12	7	5	3組
7	7	0	5組
9	6	3	7組
33	25	8	計
18.9	14.3	4.6	%

② 嫌い

計	女	男	クラス
11	4	7	1組
11	4	7	3組
9	0	9	5組
13	3	10	7組
44	11	33	計
25.2	6.3	18.9	%

③ どちらでもない

計	女	男	クラス
27	13	14	1組
20	12	8	3組
29	18	11	5組
22	12	10	7組
98	55	43	計
56.0	31.4	24.6	%

調査対象

男	84
女	91
計	175

II 資料(前記◎印を付したのもの)より、印象の強く残っている作品を2つと、まったくつまらなかった作品を2つ選んで下さい。その理由や授業形態も次にあげる項目の中から、それぞれ1つずつ選んで下さい。

△理由と授業形態は番号や符号で記入すること▽

印象に残っている作品	理由	授業形態	印象に残っている作品	理由	授業形態

〔理由〕

- ① 文章表現が巧みでおもしろかった
- ② 文章が美しかった
- ③ 身近に感じられる内容であった
- ④ 異質な世界を味わえた
- ⑤ 内容に興味、関心があった
- ⑥ 筋がおもしろかった
- ⑦ 主題に感動した
- ⑧ 人生に対する考え方に深い影響を受けた
- ⑨ 内容がむつかしすぎた

主だった反応作品

印象に強く残った作品			
作品名	男	女	計
① 羅生門	41	36	77
② 幸福	35	34	69
③ 板極道	21	18	39
④ 奇跡の人	11	20	31
⑤ さようなら一万年	9	19	28
⑥ 永訣の朝	8	19	27
⑦ 近代の短歌	4	10	14
⑧ 死にたまふ母	6	5	11
まったくつまらなかった作品			
作品名	男	女	計
① 文章について	14	30	44
② まぼろしの村	13	23	36
③ レポートの書き方	12	23	35
④ 捨てない技術	15	19	34
⑤ ことばの習得	17	12	29
⑥ スポーツと人生	8	14	22

- ⑩ 内容がばからしかった
- ⑪ 文章があまりにも個人的すぎた
- ⑫ 文章があまりにも平凡すぎて何も残らなかった
- ⑬ 主題に反撥を感じた
- ⑭ その他

〔授業形態〕

- ⑦ 先生の講義中心
- ⑧ グループ学習
- ⑨ 生徒の研究発表
- ⑤ その他・個別学習など

印象に強く残っている作品(主なもの)

組名	作品名	反応数	理由	授業形態	
1組	男	① 羅生門	14	① ₁ ④ ₄ ⑧ ₆ ⑨ ₁	㊦ ₁₃
		② 幸福	8	① ₁ ② ₁ ③ ₅ ⑤ ₁	㊦ ₈
		③ 板極道	5	③ ₁ ⑥ ₁ ⑧ ₂ ⑭ ₁	㊦ ₅
		④ 奇跡の人	3	⑤ ₁ ⑧ ₂	㊦ ₃
		⑤ 高瀬舟	2	⑧ ₁ ③ ₁	㊦ ₂
	女	① 羅生門	10	① ₁ ④ ₃ ⑤ ₁ ⑦ ₁ ⑧ ₄	㊦ ₁₀
		② 幸福	8	③ ₄ ⑤ ₂ ⑥ ₂	㊦ ₈
		③ 永訣の朝	8	② ₄ ③ ₂ ⑦ ₂	㊦ ₈
		④ さようなら1万年	7	① ₂ ② ₁ ④ ₃ ⑤ ₁	㊦ ₇
		⑤ 奇跡の人	5	⑤ ₂ ⑥ ₃	㊦ ₅
3組	男	① 羅生門	11	③ ₂ ④ ₂ ⑤ ₃ ⑥ ₁ ⑦ ₁ ⑧ ₁ ⑭ ₁	㊦ ₁₁
		② 幸福	9	③ ₃ ⑤ ₁ ⑥ ₄ ⑦ ₁	㊦ ₈ ㊦ ₁
		③ 板極道	8	③ ₁ ⑤ ₄ ⑥ ₁ ⑧ ₁ ⑭ ₁	㊦ ₈
		④ 奇跡の人	4	⑤ ₁ ⑧ ₂	㊦ ₃
		⑤ 永訣の朝	3	② ₁ ④ ₁ ⑤ ₁	㊦ ₃
	女	① 羅生門	13	① ₅ ④ ₃ ⑥ ₂ ⑧ ₂	㊦ ₁₂
		② 幸福	11	③ ₆ ④ ₁ ⑥ ₃ ⑦ ₁	㊦ ₉ ㊦ ₂
		③ 永訣の朝	6	① ₂ ⑤ ₁ ⑦ ₂ ⑭ ₁	㊦ ₂ ㊦ ₁ ㊦ ₁
		④ 奇跡の人	4	③ ₁ ④ ₁ ⑧ ₂	㊦ ₂ ㊦ ₁ ㊦ ₁
		⑤ さようなら一万年	3	④ ₃	㊦ ₃

(注) ○丸で囲んだ数字は理由番号
下の数字は反応数

○丸で囲んだ符号
は授業形態、下
の数字は反応数

印象に残っている作品(主なもの)

組名	作品名	反応数	理由	授業形態	
5 組	男	① 幸 福	9	③ ₅ ⑥ ₄	㉞ ₁₁
		② 羅 生 門	8	④ ₃ ⑤ ₁ ⑥ ₁ ⑨ ₂	㉞ ₉
		③ 死にたまふ母	6	① ₁ ③ ₂ ⑤ ₂ ⑦ ₁	㉞ ₆
		④ 板 極 道	4	⑤ ₄	㉞ ₄
		⑤ さようなら1万年	2	④ ₁ ② ₁	㉞ ₁ ① ₁
		〃 永訣の朝	2	② ₁ ⑨ ₁	㉞ ₂
		〃 高瀬舟	2	⑥ ₁ ⑩ ₁	㉞ ₂
		〃 ことばの習得	2	① ₁ ⑤ ₁	㉞ ₁
		〃 捨てない技術	2	③ ₂	㉞ ₂
	女	① 羅 生 門	9	① ₁ ③ ₁ ④ ₄ ⑤ ₁ ⑥ ₁ ⑦ ₁ ⑧ ₂	㉞ ₁₁
		〃 幸 福	9	① ₁ ③ ₄ ⑤ ₁ ⑥ ₃	㉞ ₉
		〃 さようなら一万年	9	① ₄ ② ₁ ④ ₄	㉞ ₉
		④ 奇跡の人	8	③ ₁ ⑤ ₃ ⑥ ₁ ⑦ ₁ ⑧ ₁ ⑩ ₁	㉞ ₈
		⑤ 死にたまふ母	2	④ ₁ ③ ₁	㉞ ₂
〃 近代の短歌		2	② ₁ ⑤ ₁	㉞ ₁ ㉞ ₁	
7 組	男	① 幸 福	9	② ₅ ③ ₁ ⑤ ₁ ⑥ ₁ ⑧ ₁	㉞ ₉
		② 羅 生 門	8	④ ₃ ⑤ ₁ ⑥ ₂ ⑧ ₂	㉞ ₈
		③ 板 極 道	4	③ ₁ ⑤ ₁ ⑦ ₁ ⑧ ₁	㉞ ₄
		〃 奇跡の人	4	⑤ ₃ ⑧ ₁	㉞ ₃
		〃 さようなら一万年	4	① ③ ④	㉞ ₄
	女	① 近代の短歌	7	① ₃ ④ ₁ ⑤ ₁ ⑩ ₁	㉞ ₅ ① ₂
		② 幸 福	6	③ ₄ ⑤ ₁ ⑥ ₁	㉞ ₆
		③ 板 極 道	5	⑤ ₁ ⑥ ₁ ⑦ ₂	㉞ ₅
		〃 さようなら一万年	5	① ₁ ④ ₃	㉞ ₄
		⑤ 永訣の朝	4	① ₁ ③ ₁ ⑦ ₁ ⑧ ₁	㉞ ₃
〃 羅 生 門	4	⑤ ₁ ⑧ ₃	㉞ ₃		

(注) 〇丸で囲んだ数字は理由番号
下線の数字は反応数

〇丸で囲んだ符号
は授業形態、下
の数字は反応数

まったくつまらなかった作品(主なもの)

組名	作品名	反応数	理由	授業形態	
1組	男	① 文章について	8	⑨ ₂ ⑩ ₁ ⑬ ₃ ⑭ ₂	㉞ ₈
		② レポートの書き方	6	⑥ ₁ ⑯ ₂ ⑰ ₃	㉞ ₁ ㉞ ₃ ㉞ ₁
		③ ことばの習得	6	⑨ ₁ ⑯ ₂ ⑰ ₃	㉞ ₆
		④ まぼろしの村	4	⑬ ₂ ⑬ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₄
		⑤ さようなら一万年	4	⑨ ₁ ⑩ ₁ ⑫ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₄
	女	① レポートの書き方	9	⑪ ₂ ⑫ ₂ ⑭ ₅	㉞ ₉
		② 文章について	7	⑨ ₂ ⑯ ₁ ⑰ ₃	㉞ ₇
		③ まぼろしの村	6	⑭ ₄	㉞ ₄
		④ ことばの習得	5	⑨ ₁ ⑯ ₂ ⑭ ₂	㉞ ₅
		⑤ 永訣の朝	3	⑨ ₁ ⑬ ₂	㉞ ₁ ㉞ ₁
3組	男	① 捨てない技術	5	⑦ ₃ ⑫ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₅
		② 奇跡の人	4	④ ₁ ⑩ ₁ ⑫ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₄
		③ まぼろしの村	4	⑬ ₃ ⑬ ₁	㉞ ₄
		④ 近代の短歌	4	⑨ ₃ ⑩ ₁	㉞ ₃ ㉞ ₁
		⑤ スポーツと人生	3	⑫ ₁ ⑭ ₂	㉞ ₃
		⑥ ことばの習得	3	⑩ ₁ ⑫ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₃
	女	① まぼろしの村	9	⑨ ₁ ⑫ ₁ ⑬ ₂ ⑭ ₄	㉞ ₉
		② スポーツと人生	8	⑩ ₁ ⑪ ₃ ⑫ ₃ ⑭ ₁	㉞ ₈
		③ 文章について	7	⑩ ₁ ⑫ ₄ ⑭ ₂	㉞ ₇
		④ 捨てない技術	5	⑨ ₁ ⑪ ₂ ⑭ ₂	㉞ ₅
⑤ レポートの書き方		3	⑬ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₃	
⑥ ことばの習得		3	⑫ ₁ ⑭ ₂	㉞ ₃	

○ 丸で囲んだ数字は理由番号
 ○ 丸で囲んだ数字は反応数

(注) ○ 丸で囲んだ数字は理由番号
 ○ 丸で囲んだ数字は反応数

○ 丸で囲んだ数字は理由番号
 ○ 丸で囲んだ数字は反応数

まったくつまらなかった作品(主なもの)

組名	作品名	反応数	理由	授業形態	
5 組	男	① 文章について	8	⑨ ₄ ⑫ ₃ ⑭ ₁	㉞ ₈
		② 捨てない技術	7	⑨ ₁ ⑩ ₁ ⑪ ₁ ⑬ ₁ ⑮ ₂ ⑰ ₁	㉞ ₇
		③ 近代の短歌	4	⑨ ₁ ⑬ ₃	㉞ ₂ ㉞ ₃
		③ まぼろしの村	4	⑨ ₁ ⑪ ₁ ⑫ ₁ ⑬ ₁	㉞ ₄
		⑤ 短歌の鑑賞	3	② ₁ ⑩ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₂ ㉞ ₁
	女	① 文章について	10	⑨ ₆ ⑩ ₁ ⑫ ₂ ⑭ ₂	㉞ ₁₀
		② 捨てない技術	8	⑨ ₃ ⑫ ₂ ⑬ ₁ ⑭ ₂	㉞ ₈
		③ レポートの書き方	5	⑨ ₁ ⑪ ₁ ⑫ ₃	㉞ ₅
		④ 短歌の鑑賞	5	⑨ ₁ ⑩ ₁ ⑭ ₃	㉞ ₅
		⑤ ことばの習得	4	⑫ ₁ ⑬ ₃	㉞ ₃
	⑤ まぼろしの村	4	⑨ ₁ ⑩ ₁ ⑫ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₄	
7 組	男	① 文章について	6	⑨ ₂ ⑫ ₁ ⑬ ₁	㉞ ₆
		① ことばの習得	6	⑨ ₁ ⑫ ₁ ⑭ ₂	㉞ ₆
		③ 奇跡の人	4	⑫ ₁ ⑬ ₁ ⑭ ₂	㉞ ₃
		④ スポーツと人生	3	⑫ ₃	㉞ ₂ ㊦ ₁
		④ 捨てない技術	3	⑫ ₂ ⑬ ₁	㉞ ₃
		④ レポートの書き方	3	⑪ ₁ ⑫ ₁	㉞ ₃
	女	① 文章について	6	⑨ ₄ ⑫ ₁	㉞ ₅
		① レポートの書き方	6	⑬ ₃ ⑫ ₂ ⑭ ₁	㉞ ₄
		③ まぼろしの村	4	⑨ ₁ ⑪ ₁ ⑫ ₂	㉞ ₄
		③ 捨てない技術	4	⑨ ₁ ⑫ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₄
④ スポーツと人生		2	⑬ ₂	㉞ ₁	
④ 奇跡の人		2	⑫ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₁	
④ 羅生門		2	⑨ ₁ ⑭ ₁	㉞ ₁	
	④ 幸福	2	⑫ ₁ ⑬ ₁	㉞ ₂	

(注) ○丸で囲んだ数字は理由番号
下の数字は反応数

○丸で囲んだ符号
は授業形態、下
の数字は反応数

自己表現のために「自己理解」の準備に重要な時期であり、事項である。「羅生門」を人間形成のための学習指導にかかわらせている理由である。

(四) 「羅生門」の授業経過のあらまし

第1時限——1学期に「幸福」(安岡章太郎)を学習し、生徒の身近な問題が扱っており、少年の心理の推移に目をむけさせ、筋立のおもしろさを味わっていることを指摘、特にオチの意表をついた点に小説の構成に関心を持たせて、「羅生門」の導入とした。

△参考▽ 生徒作品(1年1組 T子)

「幸福」(安岡章太郎)における少年の心理の推移についての図式

- 。気がすすまぬまま出かける。
- 。雨が降ってきたのでますますゆううつになる。
- 。おそろおそろすみっこの窓口へ行く。
- 。寝台券を一枚しか買わないことが愚かで貧乏くさいことに思えた。
- 。一度で用がかたづいてはっとする。
- 。窓口に五円紙幣がおいてあるのに驚く。
- 。駅員がつりをましがえたのだから、五円は自分の自由に使える金だと思ふ。
- 。駅員が気づいて追っかけてくることを恐れる。

。ましがいのおつりをおいてきたことを思い出して楽しむ。

。五円の使いみちについて想像している。

。ふと駅員の家の様子を空想し、気の毒な気持ちになる。

。五円を返してとてもいいことをしたような満足感に包まれ、家へと向かう。

。駅員の顔が一人の青年の顔になって感じられたことが意外でもありうれしかった。

。自分のしたことを得意になって母に話す。

。母が何も感動しないので少し不安になる。

。預かって行った金が十円であったことを知らされ、目の前の喜びが消え、幸福につきはなされた気分になる。

(生徒の感想)

少年の心の動きが、はっきり描かれていてわかりやすい作品だ。人間の心の中にあるみにくい心と、正直な心とを対比させ、正直にすることのすがすがしさ、喜びを表現してある。五円札を返すことは結果的にはを損することになったが、五円札を自分のものとして使うより五円札を返すことによって、いつもはむっつりしている駅員の笑顔を見ることができた喜びのほうが、何にもかえがたいものだ。たのだらうと思ふ。

教材については原典など特別の説明は加えず、志賀直哉の「夢殿

の救世観音を見ているとその作者というようなことは全く浮んでこない。これは作者というものから完全に遊離した存在となつていからで、これはまた格別のことである。文芸の上で若し私にそんな仕事でもできることがあつたら、私は勿論それに自分の名などを冠せようとは思はないだろう」という言葉があるが、このたびも作品の表現に即して、作品中心の読解作業を行なうこととした。導入のあと生徒作業として、「羅生門」全文を読んで、下人の心理の推移を老婆を脇役として西洋紙半枚に矢印で図式化することを指示。なお下人の主な心理の変化する時点で、下人や老婆の具体的な行動も併記させた。表現（描写）構成に関するヒントとして下人のニキビが重出することを指摘して、第1時限を終る。

（参考）生徒作品（1年5組 M子）

「羅生門」（芥川龍之介）

下人の心理の推移を図式化し行動を付記

。明日の暮らしをどうしようかと途方にくれ「盗人になるよりほかにしかたがない」とは思うがそれを肯定する勇氣がない。

い。↑「羅生門の下で雨やみをまつ」

↑「羅生門の膝上へ上がる」

。六分の恐怖と四分の好奇心をおぼえた。

。恐怖心が少しずつ消えてゆき老婆に対する憎悪がわく。

。悪に対する反感が増し、悪を憎む心が勢よく燃え上がる。

。憎悪の心が冷え得意と満足感にひたる。

。老婆が死骸の髪を抜いた理由を聞いて失望、前の憎悪が冷や

やかな侮蔑となる。

。生きるため盗人になる勇氣が生まれてくる。

。生きるため盗人になる勇氣が生まれてくる。

「老婆をねじ倒す」

ニキビについての生徒の回答

「うみをもった大きなきび」というのはまず、うみが悪を意味していて盗人になる勇氣が生まれてくるまでは、とてもにきびを気にしていて、つまり悪に走るかどうかを気にしていたことと結びついて、勇氣が生まれたあとは、悪い事をしようが、全然気にしないことを意味しているのだと思う。

第2時限——予め下人の心理の推移を図式化した生徒作業物は回収して、教材の理解度をたしかめ、読解作業に入った。標準的な生徒作品を板書して小説の構成を考えるキッカケとなるよう意図的に配慮。下人の心は幾つかの節目をもって推移しているので、段落をおさえるのに役立つ。作品の時代背景、語句（例えば市女笠、鴉尾等）については筋だてをこわさない程度に説明、本来なら予習の生徒発表がよいと思うが、入学当初より授業とは予習、授業、復習のサイクルの繰り返しかえしだと強調しているがあるので、個人的な発表では時間を取りすぎるので場合により省略、現在のテレビ環境で育った生徒は辞書を引くことになりに抵抗をもつので、教材によって

は強く指導する。辞書引きの習慣化は大切なことである。(書取もこのために行なう)読解はできる限り原文に即し、単に語句上の解義にとどまらず、円柱にとま。た一匹のきりぎりす、鷗尾の周りを鳴きながら飛びまわるカラスの描写による表現効果、ニキビの重出による下人の心理の象徴性を暗示的に指摘し、最後に「羅生門」の表題について、考えさせる。授業の流れとしては、指名読みで作品の筋をたどったが、2時間を経過して第4時限に食いこんだ。「下人の心にはある勇氣が生まれてきた」の「ある勇氣」の質問には大理解を示したので最後の作業として、最終文「下人の行方はだれも知らない」について「下人は……」、と交えて下人のその後の行動を各自思うままに書くように指示し100字詰の用紙を配布、記入させて提出を求めた。

生徒作品

1 強盗をはたらくことは、悪いことだとわかっていても、生きるか死ぬかのどたんばの時に、人間はやっぱりみんな自分が一番かわいはず、他人のことなど気にするひまはない。生きるためには強盗でも何でもやる。

2 下人は、しばらく無我夢中で走っていたが急に立ち止まった。何故かあの老婆がかわいそうになったので着物を返して行った。今度はゆっくり歩いて羅生門からはなれた。明日からどうやって生きていくかわからぬのに――

3 下人はその後金を盗んだ。それはとるに足らないほどであったが一度盗みの味をしめた彼はそれを機にすっかり盗人に

なり下がった。ある日ついに彼は検非違使に殺された。羅生門で老婆に会ったわずか半年後のことだった。

4 下人は、自分以外の盗人に、服をはがれ最後には殺され、そしてその死体は、羅生門にすてられた。

5 下人は老婆からはぎとった着物をかかえて逃げたが、しばらくすると、又、迷うだろう。なにせ気の小さい人間なのだから。

6 下人はそのまま逃げて強盗を続けたと思う。でも私は決してそんなことはできないと思う。いくら一度老婆の着物をはぎとることができたにしてももうそんな勇氣はでてこず、後悔ばかりできっと飢え死にをしてしまうと思う。

7 下人ははぎとった着物をすて、めくらめっぽうに走りつづけた。そして気がついたとき下人は寺の前に立っていた。そこで下人は、そうだ僧になろう、そうすれば善の道をすすむことができると思ひ僧になった。

8 下人は次々と強盗をしたが人の目をこまかし一度もつかまりはしなかった。京都に活気もどり、下人は、京都でも有名な呉服屋を営んでいたのである。――過去のできごとは忘れていようであった。

9 下人は老婆からはぎとった服を人にうりつけた。そして自分と同じような目にあつたものを集め仲間にして、勢力のある盗人の親分になりました。しかし、彼は、金持ちからしか物はとりませんでした。

第5時限——まとめ——

回収した短文を幾つかの類型に分けて標準的のものを教室で音読した。自己中心型(たてまえはともかく人間は自分が一番かわいいのだから盗みをつづける)、良心型(一度は盗んで外にでたが再び帰って老婆に着物をかえす)、勧善懲悪型(盗みをつづけていたが、遂に検非違使に捕まり殺された)、戦国立志型(泥棒をつづけ、ためた金で事業をおこし富豪となる)、優柔不断型(一度は盗人となったが、再びもとの心情となり遂に飢死した)、義賊型(盗みを重ねるうち富の大小に気づきねずみ小僧的な義賊となる)、その他、寺に入り僧となったとした者もあり、生徒の想像は我々の思いの外の世界をばばたくものであった。

人間が土壇場に立たされた時、どう行為するか。高校時代は人生の中で自我が目覚める大切な時期で、人生ともっとも真剣に取り組む純粹な時代であるから、自我の芽生えを大切に取扱わねばならない。まことに人格形成の忠つくり重要な時期だと思ふ。「羅生門」が印象に残った理由の④異質な世界を味わえた⑤人生に対する考え方に深い影響を受けた。このことに教師は深く思いをいたすべきだと思ふ。とはいえず早急に結論を急いで、肯定、否定の両論で結論をだしたのでは生徒に心からの納得はあるまい。人間それぞれさまさまの個性と生き方のあることを知らせ、人間心理の内奥に潜在するエゴイズムを分析し抽出して科学的光をあてて、人間のみがもつ理性、英知への志向を方向づけ、おさえとするよう意図したが果して生徒への反応はどうであらう。とまれ私の明確な善悪論は保留して、生徒の今後の読書をはじめとする人間資質と文化的教養

の向上を要望してひとまずこの教材を終えた。

生徒作品 「羅生門」を読んで

1 生きるということについて、人間の本心というものを、追求していると思つた。下人が盗みをする勇気がない、でもいざとなつたらやっつてしまふ、それが人間の心のような気がする。

(K子)

2 下人は老婆から着物をはいで逃げた。しかし、もし下人が飢え死を選んだとしたら、はたして私は心からその行為を美徳だと思つただろうか。人間にとって一番大切なものは命だ。生きたいと思ふことはあたりまえの感情なのだ。下人は迷つたあげく生きる権利を選んだのだから、誰も彼を責めることはできないと思ふ。

(K子)

3 この作品の主人公である下人にとって生きるということとは、飢え死にするよりもっと勇氣のいることだ。それは私達にとつても同じことなかもしれない。今の世の中がいやだ。どうしようもない困難にぶつつかつた。それで自殺する。そんな人にとつてこの下人の生きるという気持ちは、理解することができるのだろうか。

(T子)

4 僕は、作者がこの作品を、どうして羅生門としたかがわからない。想像すれば色々あるが、ひとつ、かつてな仮定をしてみた。羅生門とは、門のひとつのことだろう。ロダンの地獄の門というのが、心の中の門だろうと考える。片方にてれば、そこは悪人、片方に出れば善人となれる心の門。

羅生門が荒れているように人の心もあれていた。そんな中で一人の善人の心の門も羅生門のようになっていく。

(K男)

5 下人のように、生きるか死ぬかのせとぎわに立たされたら、なんでもしてよいものだろうか。おそらく一生のうちでこんな経験をする者は少ないだろう。だからこそ考えさせられるのだ、ぼくならきつとねずみ小僧のように、りっぱなギャングになって金もちから金銀をぬすみ、不幸な人にかけてやるだろう。それで、もしも役人につかまってもけっして後悔しないだろう。

(T男)

(5) 調査の事後処理について、この稿では主としてアンケートの結果から集計された、印象に強く残った作品について、過去の記憶をたどっての実践報告をしたわけだが、問題は生徒が「まったくつまらなかった作品」としたものが、果して客観性のあるものであるか、授業者の拙い指導のためにそうだったのではないか、という危惧が残っているので、今後の検討事項にぜひともしなければならぬと思う。5時限の授業の中で3回にわたる短作文の作業では生徒は熱心に文章表現活動をしたではないか。また「近代の短歌」をグループ研究として発表させた時、あるクラスでは、熱心な研究と発表、討論を行なって、小説教材を上まわる数字の強い印象をもった作品となっているのではないか。ぜひ次年度には、「文章について」拒否反応を示した問題点について真剣に取り組み、問題点の究明をはかりたいと思っている。

おわりに

高校教師にサラリーマン化傾向が顕著となったといわれる風潮の中で、勤務時間の制約を至上命令とすれば、教室外の時間はまことに制限されたものとなる。それでは部厚い教科書の指導書さえ十分には消化されないだろう。

自らにかえりみて言いきかすことであるが、終戦後の昭和23年頃には薄っぺらな文部省編の教科書以外、何ひとつ指導書の類はなかった。勿論、参考書も文献も少なかった。しかし張りのある授業をした思い出はある。いまあの時代の教材の原点に思いをいたし、情報の氾濫する現代社会で授業の能率化とは？学習指導の深化とは？そして真の国語教育は奈辺にあるか、知・情・意・体の調和のとれた全人的人間形成をめざして、国語の力のつく国語の授業とはいかにあるべきかを真剣に問うべきである。昭和57年に実施される改訂高校学習指導要領では、国語Ⅰ、Ⅱにおいて「表現」と「理解」、その基盤に「言語事項」をあげ、従来、明文化されなかった「国語表現」が選択とはいえ明確に位置づけられた。このたびの調査でわかった文章についての拒否反応に鑑みて、私が今後のもっとも大事な国語教育における課題として取り組んでゆきたいと念願している点である。

——一九八〇・四・三——

(広島県立五日市高等学校教諭)